

金戸の桜

花見の起原は農耕儀礼であり、花の咲き方でその年の豊・凶作を占っていた。「靱蒔桜」「苗代桜」などと開花の具合で田植えの期日を決めるなど農事と密接な関係があった。サクラの語源は「サ」と「クラ」を合わせたもので、サは早苗（サナエ）、早乙女（サオトメ）、五月（サツキ）のサと同じく穀霊を意味する言葉である。クラは神が降臨する磐座（イワクラ）のことで、桜は農耕の神がよりつく聖なる木と考えられた。桜を愛でる「花見」は豊作を祈念する儀式であり、満開の桜の木の下に集って神々とともに祝う予祝行事であった。また花の種をまいて花を咲かせたと云う「コノハナノサクヤヒメ（木花之開耶姫）」の「さくや」をとって「桜」になった説もある。昔は金戸にいっぱい桜が咲き、村人は春の農耕の間に手を止めて眺めていたのだ。



江戸彼岸桜

中川力家の背戸、中仙道川の縁に咲く桜は金戸で一番樹齢のある桜と云われる江戸彼岸桜である。

古老に聞くに子供の頃から同じような大きさであり、七・八〇年前から幹の大きさが変わらない。



神明社の桜

宮の桜は北陸固有の「越の彼岸桜」である。「越の彼岸桜は昭和四年に小泉源一理学博士が市内（高岡市）桜馬場通りの桜樹群を調査し、



エドヒガンザクラとコヒガンザクラの中間に位置する北陸特有の新品種であるされた。ソメイヨシノと比べて開花時期が数日早く、花はやや赤みがちで小型だが美しさには定評がある。

松田一夫家の桜

金戸で一番の大振りのソメイヨシノであろう。樹齢六〇年ほどである。主人は縁側での花下独酌が無常の喜びであるという。一人で拗ねて飲むのが性にあうのか、それとも花見も酒も一人で楽しむのが正統派であると、泰然と座している姿が目につく。



また白川郷本覚寺で新種として発見された八重の花びらを付ける「太田桜」がある。遅咲きで五月中頃に咲く。



石橋秀信家の桜

紅白梅かと紛う桜が二本並んでい
る。樹齡は三〇年余りであるが、残雪
残る東山を背景に咲く桜は夫婦桜のよ
うである。「夫婦桜」と名づけられた
桜は全国に
沢山ある
が、石橋家
はお雛様の
ように初々
しく並んで
いる。お雛
様の時期に
咲く早咲き
の「雛桜」
の品種もあ
るといふ。
左方の桜は
野口の「向
の桜」と同
じ江戸彼岸
桜である。



中川富士夫家の桜

俳人中川尚三の生家に咲くソメイヨ
シノで樹齡五〇年ほどである。富士夫
氏は母親が苗木を買って植えたのを覚
えていると云う。
尚三は教員生活後に帰農して梨の果
樹園を営みながら、金戸機場の初代社
長を務めた。晴耕雨読の傍ら海紅派の
自由律の俳句を楽しみ中塚一碧楼・野
村満花城らと交遊した。『尚三句集』
や菩提寺瑞泉寺の門前横に句碑があ
る。



南山田保育所跡の桜

金戸は役場・警察・学校・保育所・
消防などが建つ文教・行政の中心であ
った。南山田小学校の校庭に、何本も
の桜があったこ
とを記憶してい
る村人は、何人
いるであろう
か。昔の写真に
は桜が校庭をお
おうように写っ
ている。保育所
も統合されプー
ルもなくなっ
た。

